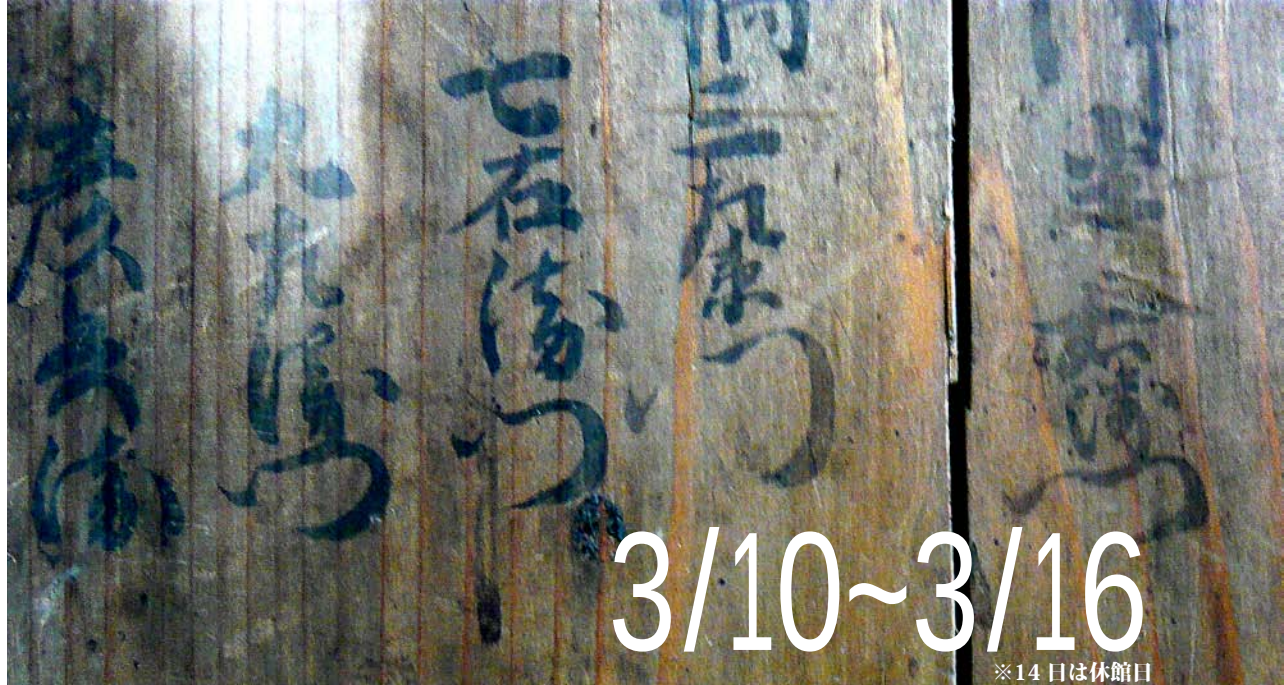


文化財展・文化財講演会

平成二十七年 度



3/10~3/16

※14日は休館日

文化財展 9:00~17:00
※狭山市立博物館にて開催

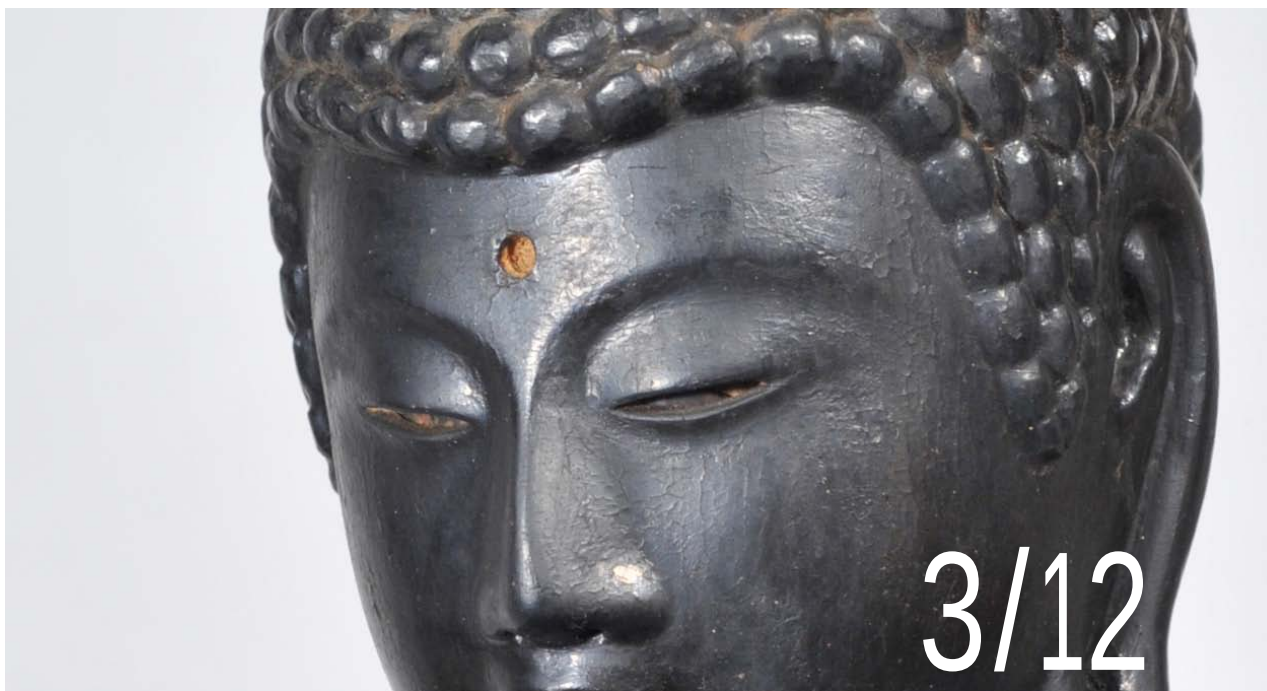
写真・解説パネル展示（まいまいホール）

東三ツ木の「木造薬師三尊像並びに十二神将像」

「堀兼井浅間社本殿厨子附棟札」



西武池袋線 稲荷山公園駅より徒歩5分



3/12

文化財講演会 13:30~16:00
※狭山市立博物館研修講義室にて開催

「東三ツ木薬師堂と木造薬師三尊像並びに十二神将像について」

講師：林 宏一氏（元 埼玉県立博物館長・現 狭山市文化財保護審議会委員）

「堀兼の新田開発と浅間（堀兼）神社について」

講師：高橋光昭氏（現 狭山市文化財保護審議会副委員長）

主催 狭山市教育委員会 協力 狭山市立博物館

ごあいさつ

平成二十七年 度文化財展・文化財講演会

指定文化財は、「市の区域内に存する文化財のうち、市にとって特に重要なもの」であるため、特に保存を図るものとして指定されます。平成28年3月1日現在、市指定が47件、県指定と併せると55件の学術的に貴重な文化財が指定・保護されています。こうした指定文化財は、指定前に調査・研究が行われ、郷土の歴史を理解する上で欠かすことの出来ない貴重な資料であることが確認されています。

初めて狭山市に指定文化財が指定されてから60年以上経った現在も、多くの研究者によって、未指定の文化財について調査・研究が毎年進められています。

さて、近年新たに学術的に貴重な資料であることがわかった文化財に東三ツ木の「木造薬師三尊像並びに十二神将像」と「堀兼井浅間社本殿厨子付棟札」があります。

東三ツ木の「木造薬師三尊像並びに十二神将像」は、像底の朱漆銘「応永六年」から、一連の類似作例の基準作に位置づけられる作品であり、関東の室町時代前期彫刻の典型作の一つに評価することが出来る仏像ということがわかりました。

また、「堀兼井浅間社本殿厨子附棟札」は、調査の結果、棟札に「延宝六年」と墨書きされていて、関東の江戸時代前期から中期の宗教建築の様相を伝える、数少ない資料の一つであるということがわかりました。

今回の展示では、その魅力と歴史を紹介します。当地域の研究と郷土の歴史に対する理解を深めるとともに、市民の皆様の生涯学習に資するものになれば幸いです。

最後に、本展示会の開催にあたり、資料調査にご尽力いただきました堀兼神社関係者、東三ツ木自治会関係者の皆様、また、調査研究に携わって下さいました文化財保護審議委員の皆様に深く感謝申し上げます。

平成28年3月

狭山市教育委員会（主管：社会教育課）

堀兼村

武蔵平野の荒野に開かれた新しい村

Horigane mura



慶安 2 年 (1649) 川越藩財政強化のため、総検地が実施され、新田村開発が始まる
 慶安 3 年 (1650) 上奥富村名主の次男が開発総責任者になる
 浅間宮の社殿建立
 承応元年～4 年 (1652～1655) この頃、堀金への入植が始まり、村ができる
 万治 3 年 (1660) 堀金村が割付状（年貢の割り振りを記した帳簿）に記載される

寛文元年 (1661) 堀金村で暫定的な検地が行われる
 寛文 6 年 (1666) 水野村ができる
 延宝 2 年 (1674) 堀兼井の石碑建立
 （これまでに上赤坂村・中新田村ができる）
 延宝 3 年 (1675) 堀金・上赤坂・中新田の各村成立後、初の本格的検地

堀金村は、川越藩の新田開発政策で誕生しました。

慶安 2 年（1649）、開発総責任者として上奥富村名主の次男・志村次郎兵衛が任命され、同時に開発引受人の人選も進められたことが、記録類から分かっています。

そして恐らく、承応年間（1652～1654）に入植が行われたものと考えられます。

その後、堀金村は承応年間の新田改めにつづいて、寛文元年（1661）に暫定的な検地を、そして延宝 3 年（1675）に本格的な検地を受けました。こうして川越藩に属する新田開発村として藩政治に組み込まれていきます。

そして、堀兼神社の建立も、時を同じくして手がけられることになりました。



堀兼之井（埼玉県指定文化財）

堀兼之井の脇には、後の川越城主・秋元喬知（あきもとたかとも：宝永元年（1704）より川越藩主）が建立した、「この凹地は堀兼之井の蹟なり」と刻まれた石碑（宝永 2 年（1705）銘）がひっそりと建っています（写真左上）。

堀兼村

堀兼神社

「ほりかねの井」が名前の由来
Horigane jinjya



堀兼神社は、慶安3年(1650)、川越城主が松平伊豆守信綱であった時、家臣の長谷川源右衛門が中心となって社殿を建立しました。この時の社名は「浅間宮」でしたが、その後、「堀兼井」の語を加えて「堀兼井浅間社」と称するようになります。

明治5年(1872)に村社となり、同40～42年(1907～1909)には、村内外各所にあった11社を合祀し、社名も「堀兼神社」と改めました。

昭和2年(1927)、社格の昇進を願い出て郷社となりましたが、昭和21年、勅令によって社格制が廃止され、現在に至ります。

珍しいことに当社は、棟札が石で造られて残っていたため、建立時の状況もわかっています。



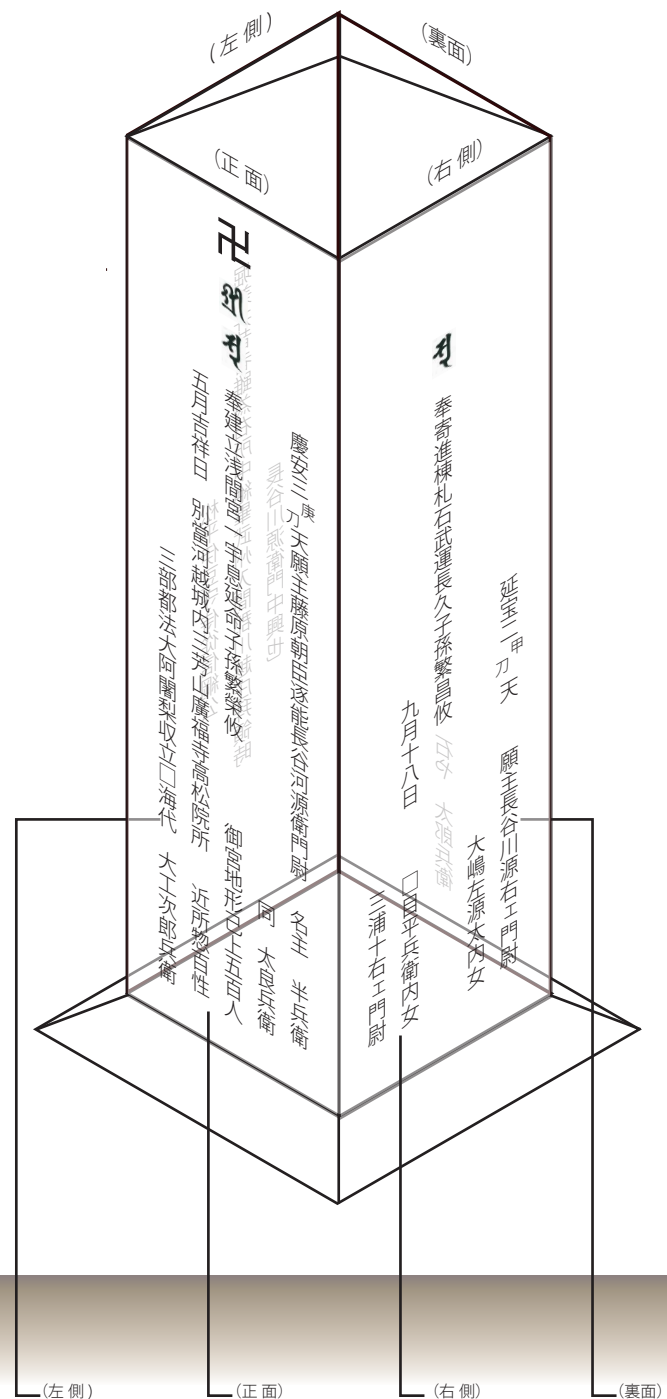
堀兼井（新編武蔵風土記稿より）

堀金村が堀兼村表記になったのも、堀兼井が、大正13年(1924)に県の指定文化財に指定(指定名は堀兼之井)されたことがきっかけとなっています。

堀兼神社



堀兼神社 石造棟札 Sekizou Munafuda



この石造棟札には、3つの記事がそれぞれ記されています。

- 1 堀兼井を長谷川源右衛門が掘り返したこと。
- 2 慶安3年（1650）に長谷川源右衛門が中心となって浅間宮（神社）を建てたこと。
- 3 延宝2年（1674）に長谷川源右衛門他数名が、この棟札石を寄進したこと。

3つの出来事は、1・2・3の順になりますが、時間は大分開いていることが分かります。

そんな時を経た事柄が、同じ石に刻まれていることから、1の記事は堀兼井の付近に立てた標識を、2つ目の記事は、慶安3年に浅間社を建てた当時の棟札を、延宝2年になってから石に転写したものと考えられます。

恐らく元の標識や棟札は木造で、腐食等が進み、今後の保存に支障をきたしていたので転写したのでしょう。

つまり25年間で、浅間社も堀兼井も、荒廃してしまったと考えられるのです。

堀兼井昔者雖為右所中絶畢武州入間郡川越庄拜領時 長谷川源衛門中興也 松平伊豆守侍從信綱公	慶安三庚 刀天願主藤原朝臣遂能長谷川源衛門尉 奉建立浅間宮一宇息延命子孫繁榮攸 五月吉祥日 別當河越城内三芳山廣福寺高松院所 近所惣百性 三部郡法大阿闍梨收立□□海代 大工次郎兵衛 名主 半兵衛 同 太良兵衛 御當地形已上五百人	延宝二甲 刀天 願主長谷川源右衛門尉 奉寄進棟札石武運長久子孫繁昌攸 九月十八日 □□平兵衛内女 三浦十右衛門尉 大嶋左源太内女	石や 太郎兵衛
--	--	--	----------------

石造棟札

堀兼神社 本殿厨子

Honden Zushi



荒廃の程が確認されてから4年後の延宝6年(1678)、浅間宮は堀兼井浅間宮として再建されました。

黒漆で塗られた本殿厨子の前面には、観音開きの扉があります。向かって右側には、波に昇り竜、左側には、波に降り竜の精巧な意匠が施されています。

唐破風(からはふ)の梁の上部には、鳳凰の意匠が施されており、梁自体には、渦に若葉が彫り込まれています。この梁の紋様や造りは、江戸時代の寛文期の特徴を有しています。

前面及び両側面には、木鼻(きばな)と、中備(なかぞなえ)として墓股(かえるまた)も備えられています。木鼻は、正面に獅子、側面手前側に猿、奥側に象の意匠が見られます。

部分的に残っている顔料から推測すると、建立当初は、赤・緑・青などの、鮮やかな色調であったと考えられます。

また、この厨子と一緒に保管されていた棟札によって、再建時の状況がわかります。



(波に降り竜)



(波に昇り竜)

本殿厨子



①唐破風の内側部分
梁の上部の鳳凰、梁には渦に若葉



②側面の墓股



②正面の墓股
鮮やかな色が残る梅にうぐいす



③木鼻 (象)



③木鼻 (左：獅子、右：獏)

かえるまた
②墓股

きばな
③木鼻

からはふ
①唐破風

きばな
③木鼻

扉外側の竜
(「本殿厨子」に掲載)



本殿厨子附棟札

Honden Zushi
tsuki Munafuda

堀兼神社

御宮造管主人馬寄進之

□衛門 大工
居石式駄
高「」
矢嶋太郎兵衛
大塚村名主
宮澤忠右衛門

半兵衛

上赤坂村名主

高橋三左衛門

下奥隅村 七右衛門

居石三駄 九左衛門

寄進 彦兵衛

□□□□人

惣百姓中

梵字

堀兼井浅間社

當社者雖為古來之靈場廢年久于茲□ 松平伊豆守信綱公御領之

時河越町奉行長谷河源右衛門尉始奉建立宮殿一字訖于時慶安三年

也 信綱公之嫡孫伊豆守晴綱公御領之節 浅間宮居上下之地被免

除之 稻荷山神愛宕以上三座之 神為末社 浅間宮既經星霜漸及

損壞且殿制依為狹小今度某憲海新奉造進 神殿者也

延寶六年戊午林鐘吉祥日

三芳山廣福寺高松院堅者法印憲海謹記

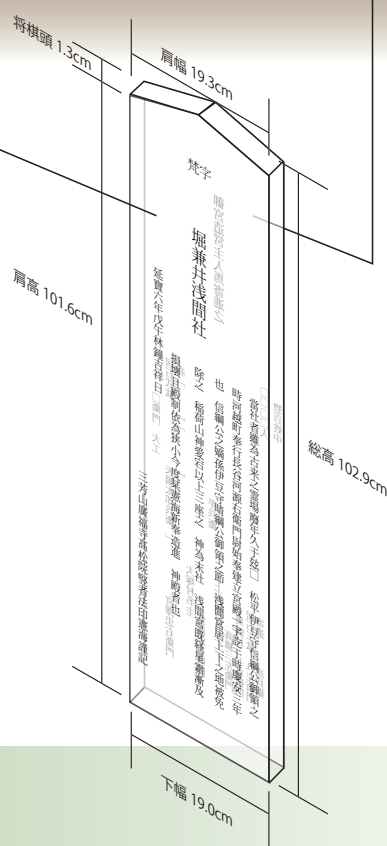
棟札の表面には、『この神社は、古来の靈場ではあるが、江戸時代の中頃には既に廃れて久しかったので、川越藩主の松平伊豆守信綱の治世の時に川越町奉行の長谷川源右衛門遂能が建立を始め、慶安三年（1650）に完成した』という経緯が記されています。これは、石造棟札と内容が一致します。

また、その後、『信綱の嫡孫である伊豆守晴綱（信輝）が治めている時に、上下浅間宮は年貢免除となり、稻荷山愛宕神社と合わせて三座となったものの、殿舎は長い年月を経て損壊してしまっている上、本来より狭小となっていた』と記されており、一時荒廃していたことが読み取れます。

さらにその後、「延宝六年（1678）、廣福寺高松院の憲海が新たに建立した』との記事が続き、現在の本殿が江戸時代の中頃に出来上がったことが分かりました。

なお、裏面には、この再建事業に携わった近隣の村の人々の名前が記されており、多くの人がこの再建事業に関わっていた事がわかりました。

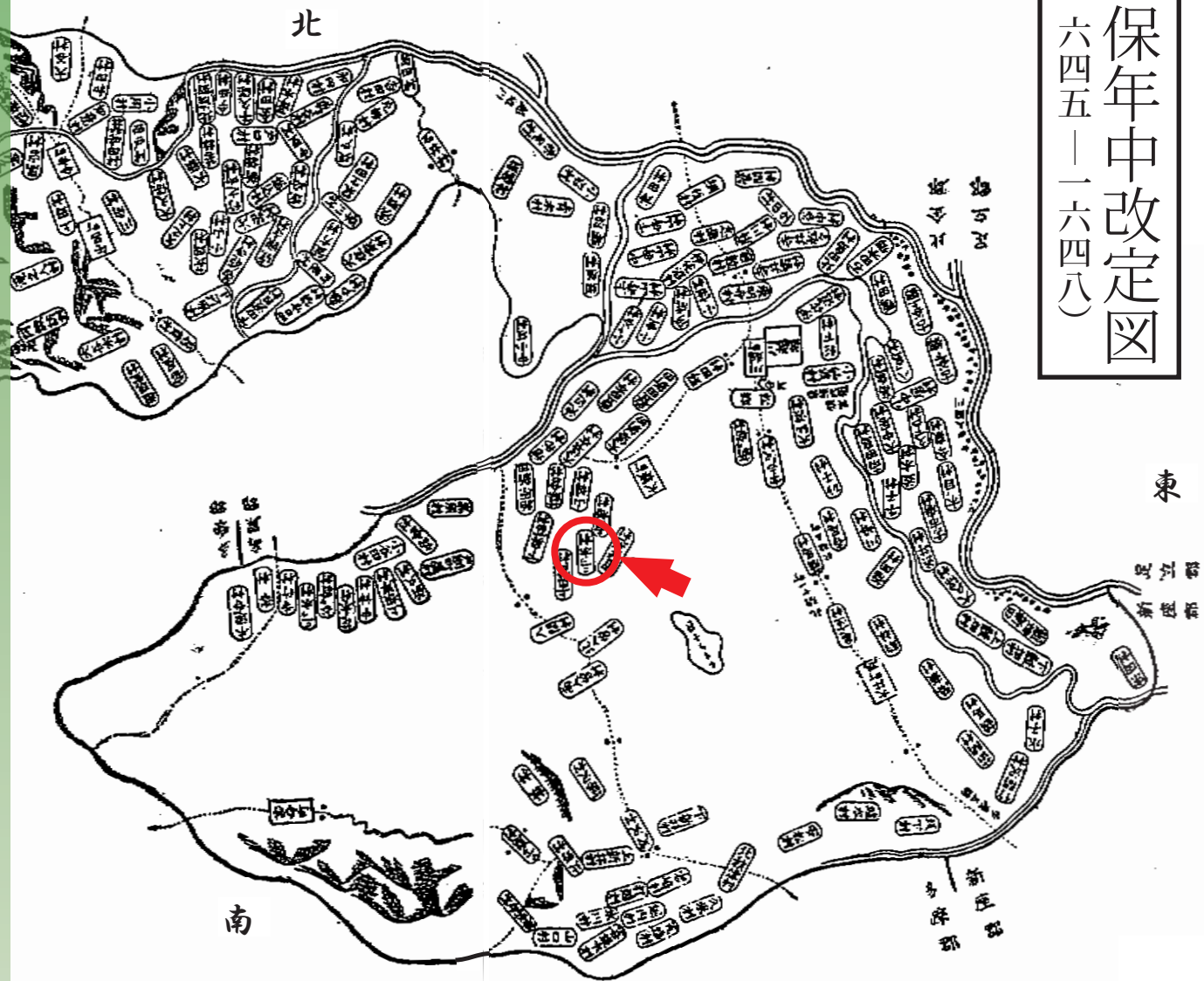
本殿厨子附棟札



東三ツ木村

Higashi Mitsugi mura

歴史の転換期に生まれた村



『新編武蔵風土記稿』より

東三ツ木は、明治22年（1889）に堀兼村などと合併するまで、三ツ木として独立した村でした。

『新編武蔵風土記稿』によると、むかしこの地はほとんど手を入れていない原野でした。

1332～33年ごろ、鎌倉幕府を倒そうとする新田義貞軍に、幕府側の金子和泉守国重という者が敗れ、故郷の金子領三ツ木村（現 入間市）へ落ち延びました。

その後、この地に移って開墾し、村を作りました。その際に、金子姓を故郷と同じ「三木（みつぎ）」に改め、この新しい村も「三ツ木村」と名づけました。

これが三ツ木村の誕生で、こののち、元々の三ツ木村と混合しないために、東三ツ木村と改められました。



『新編武蔵風土記稿』より

東三ツ木村

東三ツ木薬師堂

人々が見守る中、薬師様が微笑む

Higashi Mitsugi
Yakushidou



南北朝時代、東三ツ木の開祖である三木和泉守国重は、戦いに出かける時に村落一帯を焼き払い、家財をすべて失いました。

戦いが終わり、家の守護仏だった薬師如来像を案じて焼け跡に戻ると、夢に薬師如来が現れ、「汝の家より六十間（約 108 メートル）程隔てる午未（南西）の方に当る草原の中に鎮座している」と告げたので、国重は疲れも忘れて探しに行き、夢のとおりに見えました。

その後、再び夢枕に立った薬師如来の「万民の守護ができるように」とのお告げどおり建てたのが、この薬師堂です。



東三ツ木薬師堂

薬師如来坐像

東三ツ木薬師堂

Yakushi Nyorai zazou



この薬師如来は、東三ツ木の開祖三木和泉守国重の守護仏として伝来した尊像です。

「東方薬師」と称され、古くから地域住民の心の支えとなってきました。

「応永六 (1399) 年常仁作」の銘があり、肉髻が低く平らで、髪際は強くカーブしています。

卵形の秀麗な面貌で、左手には薬壺を持っています。やや猫背気味で、それを被う着衣の表現等には、優美で装飾的な衣文線が配されるような特徴があり、室町時代前期彫刻の典型作の一つと評価されています。



薬師如来坐像の像底部には、朱漆で「岩立作者 常仁 應永六年九月十八日」の文字が見られます。「岩」字は「造」の誤記と考えられ、この銘から制作年代や作者がうかがえます。

薬師如来坐像

日光菩薩像

東三ツ木薬師堂

Nikkō Bosatsu zou



月光菩薩像

東三ツ木薬師堂

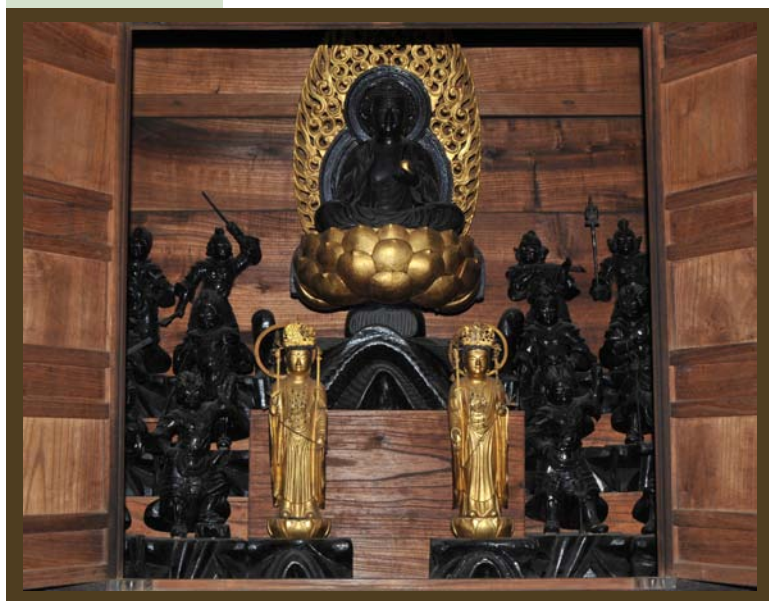
Gakkō Bosatsu zou



両像ともに髪を頭の上に結い上げ、金銅製透彫の宝冠を着けています。覆肩衣、大衣をまとい、靴を履いて、両足先を揃えた立ち姿です。

日光像は右腕を下に降ろし、左腕を曲げて持物を持っています。逆に月光像は左手を降ろし、右腕を曲げて持物を持っています。

様式は共通しているものの、作風が違い、日光像は丸みを帯びた柔らかさ、月光像は直線的な硬質な美しさで表現されています。これは、両像の制作時期や造立した仏師が異なるためです。



日光・月光菩薩像

子神像

東三ツ木薬師堂
Shi Shin zou



丑神像

東三ツ木薬師堂
Chū Shin zou



寅神像

東三ツ木薬師堂
In Shin zou



飾りのついた皮革製兜を被り、前頭部には、左斜めに頭を向けて背を丸め、後方に尾を流す子（鼠）の全身像の標識をつけています。

眉根を寄せ、唇は強く引きむすんでいます。

左手は手のひらを上に向け、右手は軽く拳を握って持物を持っています。

焰髪、後頭部で髻を結び、前頭部に大きな角を持つ丑の頭の標識をつけています。

眉をつり上げて両眼を大きく見開き、開口しています。

腰を右に捻り左脚を岩上に踏み上げて立っています。

右腕は外側にまげ、軽く拳を握って腰に添え、左手には長い剣を持っています。

焰髪、後頭部で髻を結び、前頭部に耳を立てわずかに開口した寅の頭の標識をつけています。

腰をやや屈めて右脚を大きく踏み出しており、右手は胸前で第一・二指を伸ばして印を結び、左手は前に下ろして持物を持っています。



東三ツ木薬師堂
卯神像
Bou Shin zou



東三ツ木薬師堂
辰神像
Shin Shin zou



東三ツ木薬師堂
巳神像
Shi Shin zou

焰髪、後頭部で髻を結び、前頭部にわずかに耳を立てた竜の頭の標識をつけています。

眉を寄せ両眼を見開き、口は閉じてしかめ面の表情を見せています。

右手は上に掲げ軽く拳を握り、左手は斜め前方に伸ばして棒状の持物を持っています。

宝珠形の飾りがついた皮革製兜を被り、正面に開口する竜の頭の標識をつけています。

眉をつり上げて両眼を見開き、下唇を噛みしめ激しい怒りを表しています。

左に腰を捻り、右脚は前に踏み出した姿で、左手に宝珠を捧げ、右手で短柄の錫杖を持っています。

頭頂で髻を結び、根元を元結でしばっています。

髪は平彫り、紐一条、列弁文からなる天冠台をつけており、髻正面に巳の頭の標識をつけています。

両眼は半眼に開き、平常相をしています。

左手は肘を軽くまげて腰に添え、右手に刀を持っています。

午神像

東三ツ木薬師堂
Go Shin zou



未神像

東三ツ木薬師堂
Bi Shin zou



申神像

東三ツ木薬師堂
Shin Shin zou



焰髪、後頭部で髻を結び、前頭部に耳のたれた午の頭の標識をつけています。

目はつり上がり、唇は引き締めています。

右手は拳を軽く握って腰に添え、振り上げた左手には短い三叉の戟(ほこ)を持っています。

焰髪、後頭部で髻を結び、前頭部に、耳を前にたらしめた未の頭の標識をつけています。両目を見開き、口は閉じています。

わずかに腰をひねって右足を前に出した姿で立ち、左手は手のひらを上に前に出して刀印を結び、右手で杖を持っています。

焰髪、後頭部で髻を結び、前頭部に申の頭の標識をつけています。

眉を吊り上げ両目を見開き、唇はきつく閉じています。

左に腰をひねり、右足を岩上に踏み上げています。

左手は腰に添え、右手を高く上げ十字槍状の武器を持っています。



東三ツ木薬師堂
酉神像
Yū Shin zou



東三ツ木薬師堂
戌神像
Jutsu Shin zou



東三ツ木薬師堂
亥神像
Gai Shin zou

宝珠形の飾りがついた皮革製兜をかぶり、酉の頭の標識をつけています。

眉を寄せて両目を開き、上歯が見えるほどに口を開けています。

右手は第二・三指を立てて印を結び、左手では短い棒状の武器を持っています。

側頭部・後頭部に髪を房状に垂らし、頭頂部に戌の頭の標識をつけています。

唇を強く噛みしめ、左足を前に踏み出した姿で、岩座に立っています。

左手は頭上に振り上げて弓を持ち、脇に下げた右手には矢を持っています。

焰髪、後頭部で髻を結び、前頭部に亥の頭の標識をつけています。

眉も目もつり上がり、口を引き締めて閉じ、左足を前に踏み出して立っています。

左手は前に出し、手のひらを上に握って杵を持ち、右手は振り上げて長大な剣を持っています。